

2022年8月21日 礼拝説教要旨
 詩編講解説教119 「救いの手引き」
 詩編119：1～8、マタイ5：17～20

ご存知のように第119編は詩編の中で最も長い詩編です。第119編の見出しには「アルファベットによる詩」とあります。そして8節ごとが一まとまりになっていて各セクションの冒頭に「アレフ」「ベト」「ギメル」「ダレト」とヘブライ語のアルファベットが表記されています。ヘブライ語のアルファベットは22文字ありますから8×22で176節になります。またこれはヘブライ語の聖書を見るとよくわかりますが、例えば最初のアレフのところは1～8節の冒頭の単語の頭文字が全部アレフになっています。それは9節以下のベトでも同じでして頭文字が全部ベトになる。こういう言葉遊びをするのです。それゆえに119編は技巧的で無理があり、内容も変化に乏しいという評価があります。しかしこれは単なる言葉遊びではなく、内容的にも非常に練られたものであり、しかも詩人の内面をよく表現しているものであることに気づかされます。

例えば、有名な「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」は105節にあります。この詩人は暗闇と言えるような状況の中で、神さまの御言葉だけが頼りというような経験をしています。それは今日のわたしたちも同じではないでしょうか。今は確かに悪い時代です。先行きの見えない闇の中を歩むような日々を過ごしています。うっかり足を踏み外して深い谷を駆け落ちるようなこともある。あるいは完全に路頭に迷うこともある。自分がどこにいるのか、右も左もわからない。問題が多すぎてどこから手をつけていけばいいのかわからない。でもそういう時にも神さまの御言葉が進むべき道を照らしてくれる。これは気休めではなく、実際に詩人はそういう経験をしています。

先週は一人の愛する兄弟を神さまの御許に送りました。深い悲しみを覚えます。特にご遺族は闇の中に突き落とされたような感覚を覚えるでしょう。火葬場で待っている時に、教会員の方ですが、亡くなられた兄弟のお嬢さんがわたしのところに来て「葬儀で読まれた聖書の言葉は自分がいちばん好きな聖書の言葉でした」と言われました。葬儀ではパウロ書簡から「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしは弱いときにこそ強い」(Ⅱコリント12：10)を読みました。この御言葉が悲しみに沈むわたしたちの足元を照らすのです。これは何と幸いなことでしょうか。このような幸いを「いかに幸いなことでしょう」(1節)で始まる詩編第119編は伝えています。

第119編はアルファベット22文字の1文字につき8節ごとに割り振られています。なぜ8節なのかというと、この第119編が律法を8通りの言葉で表現していることに関係していると言われます。この1～8節の間に「律法(トーラー)」(1節)「定め(エドゥート)」(2節)「命令(ピクディーム)」(4節)「掟(フッキーム)」(5、8節)「戒め(ミツオート)」(6節)「裁き(ミシュパティーム)」(7節)が出て来ます。この他に「言葉(ダーバール)」と「仰せ(イムラー)」があります。これで8つとなります。ただ8つと言っても、別々のものではなく、律法も命令も掟も戒めも裁きも同義語でありいずれも律法を中心とした神の言葉を意味しています。旧約聖書において神の言葉の中心は律法(トーラー)です。具体的にはモーセ五書の部分ですが、それが神の民の生きる指針となりました。

また1～8節では「道」という言葉が繰り返されます(1、3、5節)。それはわたしたちが歩むべき人生の道です。神の民にとってそれは約束の地へ向かう旅路であり、神の国、最後の完成に向かう道です。その道において律法(トーラー)が正しく目的地に向かって導いてくれる、手引きしてくれるのです。そこに御言葉の役割があります。けれども注目していただきたいのは、この詩人は基本的に自分が正しい道を歩んでいるとは思っていません。自分が律法を守っている、完全であるとは思っていないのです。「わたしの道が確かになることを願います」(5節)とあります。願うということは、まだそれを得ていないという自覚があります。また「あなたの正しい裁きを学び」(7節)とありますが、学ぶということも自分が未熟であり、失敗する者であること、不完全であることを認めているということです。だから学ぶのです。そして決定的なのは8節で「どうか、お見捨てにならないでください」と懇願します。詩人は「神さま、このような失敗だらけのわたしを見捨てないでください」と言っています。

ちなみに第119編の最後176節はこういう御言葉で閉じられます。「わたしが小羊のように失われ、迷うとき、どうかあなたの僕を探してください。あなたの戒めをわたしは決して忘れません」自分が羊のように失われ、迷う存在であることを認めています。この詩人は自分の弱さを知り、神さまの恵みに頼らざるを得ない者であることを知っているのです。自分の中には神さまに従う力はない。ただ神さまの御言葉だけが頼りであるという姿勢が第119編に一貫しています。

ここに信仰者の基本的な姿勢、謙遜さが表れているのではないのでしょうか。自分が律法を守れる自信はない。守れないからこそ、御言葉を求め、これに学び、聞き続ける必要がある。しばしばわたしたちが御言葉を辛く感じてしまうのは、自分に御言葉を守る力があると考えている時です。だから律法を守れない自分を責めたり、人を裁いたりしてしまう。そういう時に信仰生活は辛くなります。でもわたしたちはもともと罪ゆえに律法を守れないのです。神さまに喜ばれるような生き方ができない。それは自分の歩みを振り返れば明らかでしょう。「どうか、お見捨てにならないでください」(8節)この叫びは詩人の正直な心の叫びであり、わたしたちの偽りのない姿なのです。

だからこそ、わたしたちにイエス・キリストが与えられました。今日はマタイによる福音書を読みました。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ5:17)イエス・キリストこそ律法の完成者です。わたしが自分の力で律法を完成させるのではありません。それなら一生かかっても完成できないでしょう。でもキリストが生ける神の言葉として律法を全うしてくださる。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)この道であるキリストが救いの手引きとなって、わたしたちはまったき道を目的地に向かって歩むことができるのであります。そこに信仰の道を歩む幸いがあります。